

渡辺 敏弘療法士の訓練法

立ち上がるためのエスコート（立たすのではなく四つ這いから立ち上がるための）訓練に必要な7つのポイントを以下に示す。

1 関節可動域の改善と筋力強化

持続的ストレッチを主に行う。患者には心地よい伸張を心がける。体幹筋のストレッチ（タオルのしぼり運動とよぶ。）はリズムカルにクイックストレッチを繰り返す。長座位で下肢を伸張、外転し内転筋・ハムストロングをゆっくりストレッチする。筋力強化には患者に痛みや刺激を与え逃避反応を利用して痙性筋の筋力強化をはかる。また、従手抵抗訓練として子どもの足背屈運動にセラピストが従手抵抗を加え、固定点から素早く手を放す。これをリズムカルに繰り返す。指示に従える子どもには、四つ這い位で下肢の交互の自動屈伸運動、腕立て伏せ運動、ブリッジ運動、足関節の自動背屈運動を筋力強化として行わせる。

2 脳への刺激を多く与える。

大脳の運動領野で最も大きい顔と手関節以下、足関節などを脳の出張所ととらえ刺激を多く与えることで脳を活性化させることをねらう。

3 脳に十分な酸素の供給を行う。

しっかり患者を怒らせ、泣かせ深呼吸を助ける。痛み刺激を入れて患者をしっかりと怒らせて真っ赤な顔になるまで刺激を与える。そして、脳圧を高めさせるように努力する。微弱な鳴き声しか出ない赤ちゃんはよくチアノーゼをおこすが、この訓練を開始すると2～3日で改善がみられるようになることがある。

4 毎日治療が必要な人には療法士が刺激を入れ訓練する。

他のいくつかの訓練のように親に手技を教え、親任せにするのではなく、必要なときには療法士が満足のいく治療を行う。母親にセラピストが行うべき難しい治療を要求しない。

5 腹這い（もがき運動）は痙性・強鋼を除去していくうえで大切

上肢のクロールパターンに伴う体幹の回旋運動と下肢を交互に腹部へ引き込む運動がみられる。もがき運動を何度も繰り返し柔軟性と体力をつける。これは呼吸筋や腹筋の筋力強化となる。この姿勢管理は親や家族の監視下で生活の中で観察していく。

6 快食・快眠・快便の促進が大切

この訓練はさわやかに生活できるよう適度な疲労と十分な呼吸を助ける。（訓練が終わると疲れでよく眠る。）

7 良い変化を発達ノートに記入してもらう

すべてプラス思考し、親にその変化がどんなに価値のあることか、なぜその動きが大切かを十分に説明する。1日のうち訓練時間以外の23時間を家族から情報収集し、それを訓練に反映させる。

痙性筋の筋力強化の方法を示し、その重要性を明確にしていること、訓練時間以外の様子を発達ノートに記録させ家族を情報提供者として位置づけ、難しい訓練手技習得を母親

に求めないことが特徴である。渡辺訓練士は日本福祉大学久保田氏の神経可塑性の概念を長年の臨床経験から肌で感じていたと思われる。私の外来に渡辺氏の訓練を受けに月の内半分松山市に仮住まいしている1人の四肢麻痺の男児がいる。確かに訓練効果はボバース、ボイタの訓練をしていたときよりはっきり現れている。筋力強化ができていることは明言できる。しかし、生活を犠牲にし、保育などの経験が少なくなっていることが気がかりではある。

出典

岡安 勤：渡辺敏弘療法士の訓練法． 穂山富太郎，川口幸義編著：脳性マヒハンドブックー療育にたずさわる人のために． 医歯薬出版，2002． 175－176より医歯薬出版の許諾を得て転載